大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立民族学博物館

地の先へ。
知の奥へ。
みんぱく
30th
Anniversary

開館30周年記念 みんぱく公開講演会
毎日新聞夕刊連載コラム「異文化を学ぶ」をもっと学ぼう！

新しいライフ・デザインを求めて

▮日　時：**2008**年**3**月**7**日（金）18：30～20：30（開場17：30）
▮場　所：オーバルホール　大阪市北区梅田3-4-5 毎日新聞ビルB1
▮定　員：400名　▮参加費：無　料

主 催：国立民族学博物館・毎日新聞社

プログラム

17：30〜18：30　**受　付**

18：30〜18：35　**開　会**
藤原　健（毎日新聞大阪本社 編集局長）

18：35〜18：40　**挨　拶**
松園万亀雄（国立民族学博物館長）

18：40〜19：10　**講　演①**
「森に生きる先住民―ロシアと中国のあいだで―」
佐々木史郎（研究戦略センター 教授）

19：10〜19：40　**講　演②**
「アーミッシュのユートピア探求」
鈴木　七美（先端人類科学研究部 教授）

19：40〜19：55　**休　憩**

19：55〜20：30　**パネルディスカッション**

司会　森 明子（研究戦略センター 教授）

目次

松園万亀雄「**ごあいさつ―開館30周年記念みんぱく公開講演会によせて―**」…… 1

森　明子「**講演会テーマ『新しいライフ・デザインを求めて』について**」…… 2

佐々木史郎「**森に生きる先住民―ロシアと中国のあいだで―**」…… 3

鈴木　七美「**アーミッシュのユートピア探求**」…… 7

開館30周年事業報告・ご案内 …… 11

ごあいさつ ―開館30周年記念みんぱく公開講演会によせて―

国立民族学博物館長　松園　万亀雄

◇はじめに

国立民族学博物館（以下、「みんぱく」と略称）は、毎年、東京と大阪で公開講演会を開催しています。大阪の公開講演会は、2005年から毎日新聞社との共催で、「災害の記憶」（2005年）、「世界の伝統芸能・最前線」（2006年）、「日本で暮らす―移民の知恵と活力」（2007年）というテーマをとりあげてきました。今年は「新しいライフ･デザインを求めて」という題のもとに、環境を、生活スタイルや文化との関わりのもとに考えます。毎日新聞社のご協力に、厚くお礼申し上げます。

大阪での公開講演会は、吹田市にある「みんぱく」の研究者たちの活動を、ひろく関西のみなさんに知っていただき、文化人類学・民族学に関心をもっていただくことを目的としています。

◇国立民族学博物館開館30周年について

「みんぱく」は、文化人類学・民族学に関する調査・研究をおこなうとともに、その成果に基づいて、民族資料の収集・公開などの活動をおこなう研究所です。1970年（昭和45年）に開催された大阪万博の跡地内に、1974年（昭和49年）に創設され、その３年後の1977年（昭和52年）11月に一般公開しました。

2007年（平成19年）は開館30周年で、11月14日に秋篠宮同妃両殿下のご臨席のもと、関係者約450名が出席して記念式典を行いました。人間文化の基礎的研究と、国際開発協力などで社会的な貢献を果たすこと、さらに、研究と展示をとおして文化人類学・民族学の成果を市民の方々に提供していくことを、「みんぱく」の使命と心得、決意をあらたにしているところです。

開館30周年を記念して、さまざまなプログラムを提供してきましたが、この３月末に区切りを迎えます。この公開講演会は、一連の記念事業の終盤に位置するもので、文化人類学・民族学の知見をもとに、将来の私たちの生活を展望しようとする、未来をみつめた企画になっています。

文化人類学・民族学は、現実の生活のなかで育まれている文化に目をむけ、どのように変化しているのか、何が求められているのか、ということにも関心を寄せます。「みんぱく」の研究者たちが、異国でのフィールドワークを通して何をどのように見てきたのか、そこで培ってきたものから、現代世界に何を提言しようとしているのか、耳を傾けてみてください。現代世界が大きく変わりつつあるなかで、「みんぱく」の研究も、ともに動いています。

「みんぱく」の研究、展示、催しなどの活動について、くわしくはインターネットの「みんぱく」ホームページをご覧ください（http://www.minpaku.ac.jp）。たとえば、開館30周年記念事業の「みんぱくウィークエンド・サロン研究者と話そう」は、明日もおこなわれます。３月13日からは、特別展「深奥的中国―少数民族の暮らしと工芸―」が開催され、特別展に関連する講演会「みんぱくゼミナール」も行われます。携帯電話でアクセスする方は「みんぱく携帯サイト」をご利用ください（http://www.minpaku.ac.jp/keitai/）。これらの最新情報のほかに、ホームページでは「みんぱく」が展示・収蔵している標本24万点の基本情報を公開し、文献図書資料その他の検索もできます。「みんぱく」の資料を、市民の方々に、大いに利用していただきたいと思っています。

講演会テーマ
「新しいライフ・デザインを求めて」について

研究戦略センター 教授　森　明子

◇環境と生活と文化のつながり

今回の講演会では、「環境」を「生活」という視点から考えます。「環境」は、この数年、地球規模のキーワードになりました。たとえばゴア副大統領も出演して話題を呼んだ映画「不都合な真実」（2006年）は、地球温暖化をテーマにしていました。今年７月におこなわれる北海道洞爺湖サミット（主要国首脳会議）は地球環境問題を主要なテーマにします。いまや「環境」は、名実ともに、国際政治の主要テーマです。こうなったのは、「環境」が差し迫った現実の問題として、国家の経済や国家間関係を左右するからです。しかし「環境」は一面で、人々の生活と結びついて、長い時間をかけて、ゆっくりとつくりあげられてきたものです。このような環境の理解は、今日においても間違っているわけではありません。

文化人類学・民族学は、人々が生活のいとなみのなかで培ってきた文化に注目し、研究する分野です。人々の生活は環境の一部であると同時に、環境も人の手が加わることによって独特の景観をもつようになったと考えます。生活と環境の関わりのなかで、それぞれの民族の文化や伝統、歴史の深層の部分が形作られてきたと考えるわけです。フィールドワークをおこなう研究者たちは、長い時間をかけて現地の人々と生活をともにしながら、文字や言葉だけでなく五感を使って、生活と環境の相互作用が織り成す文化を探り出そうとします。この講演会では、この「環境」と「生活」と「文化」の相互的な関係に目をむけます。

たとえば技術は、このような環境と生活との相互関係のなかで形成されたものです。技術をもって、人間は資源を利用してきました。ただし技術は移動しますから、新しい技術の導入が、これまでその地で培われてきた環境と生活の関係を大きく変えることもあります。身近な例として、「里山」を考えるといいでしょう。里山は、人間が長い時間をかけて自然に手を入れることによってできた環境ですが、人々が里山の資源を利用しなくなったとき、里山によって維持されてきたシステムが破綻をきたしています。

◇21世紀のライフ・デザイン

20世紀に普及した近代技術をもって、私たちは簡便、清潔、迅速を追及してきました。21世紀の環境問題は、このような技術や資源の利用のあり方に再考を迫っているといえるでしょう。

先住民の人々は、伝統的な生活を送っていると思われることが多いですが、現代世界に生きる彼らは、伝統的な技術とともに、近代的な技術も利用しています。彼らはどのような「選択」をしているのでしょうか。18世紀にヨーロッパから新大陸に移動したアーミッシュの先祖は、近代技術を拒むという選択をしましたが、現代に生きるその末裔たちは、先祖の伝統を受け継ぎながら、新しい選択もしているようです。

21世紀に生きる私たちは、生活のあり方を環境との関係から考える時代に生きているといえるでしょう。この講演会では、ライフ・デザインということばに、ライフスタイルの設計という積極的な意味をこめています。異文化を学びながら、現代世界の「環境」について考えていきたいと思います。

森に生きる先住民 ―ロシアと中国のあいだで―

研究戦略センター 教授　佐々木　史郎

1. 極東ロシアの民族と歴史

広大なロシア連邦の中でも、極東と呼ばれる最も東に位置する地域には、17世紀以降に移住してきたヨーロッパ系のロシア人、ウクライナ人など以外に、「先住民族」と呼ばれる古くからこの地域に暮らしてきた人々がいる。彼らは人口が小さく、大きい民族で１万3,000人、小さい民族で数百人程度しかおらず、ハバロフスク地方の場合は全人口の1.3%、沿海地方の場合には0.1%に満たない。また、その文化や言語もロシア文化、ロシア語の強い影響を受けて、一見消滅の危機にあるように見える。しかし、それでも地域の独特の文化として先住民族自身だけでなく、移住してきた人々にも大切にされているものがある。

ここではそのような極東ロシアの少数民族の文化の中から、沿海地方に暮らすウデヘと呼ばれる人々の暮らしを紹介する。ウデヘはロシア全土（とはいっても沿海地方とハバロフスク地方にしかいない）でも1,600人ほどしかいない少数民族である。顔立ちは、モンゴロイド系であることから、日本人と全く変わらない。ここで彼らの生活を紹介するのは、彼らが森の民であり、狩猟、漁撈、採集といった一見原始的な生産活動をしながら、激動の20世紀を生き抜き、しかも、自分たちが暮らす天然林を木材開発と両立させながらしっかりと守ってきているからである。新しい資源の開発や産業の育成によって効率的な成長をもとめる現代の経済システムにおいて、手つかずの天然林を守り抜くのは奇跡的な行為である。実際、極東ロシアの森も20世紀の100年の間に次々と開発の手が伸びて伐採されてしまった。特にソ連崩壊後の20世紀最後の10年は、「乱開発」ともいえるほとんど無秩序の伐採が入り、ウデヘたちが守る森が

ロシア沿海地方

島のように残された形になっている。ここでは、その島のように残された森の中でも最も活力のある、ビキン川という川の流域に暮らすウデヘたちのライフスタイルの変化を追いながら、開発と森の保全との両立について考えていくことにしたい。

2. 伝統的なライフスタイルと交通手段、狩猟用具

ウデヘの伝統的な生業は狩猟、漁撈と有用植物の採集である。このような生業に従事するというとすぐに「未開」な狩猟採集民というイメージを抱かれてしまうが、彼らの狩猟と採集は自給自足のためだけに行われるのではない。彼らは農業で言えば「換金作物」に当たるものを狩猟と採集から生産していた。その代表的な産物が毛皮と野生のチョウセンニンジンである。毛

伝統的なクロテン用のわな

皮、特にクロテンやオコジョの毛皮はヨーロッパでは柔らかい金といわれるほど高価なものとされ、中国でも元、明、清の最後の３大王朝で珍重された。ウデヘの祖先たちはその毛皮と高価な薬の原料であるチョウセンニンジンを商人に売ることで、狩猟や漁撈だけでは手に入れることのできない食材や生活必需品を購入していたのである。また、中国王朝の支配下にあった時代には、王朝が毛皮生産地の人々を手厚く保護した。

そのような状況下にあって、ウデヘたちには独特の狩猟技術が定着した。それは毛皮をできるだけ痛めないで効率的に捕獲することをめざした罠類である。しかも、組み立てに必要な材料や道具類は全て自分たちで用意することができるものだった。当時の交通手段も手こぎのボートや丸木舟、スキー、そりといった人力やせいぜい畜力をつかうものであり、商人とやりとりされるのは生産物だけであって、用具類や交通輸送手段は外の世界に頼る必要がなかった。したがって、その面では自立、独立していたわけである。

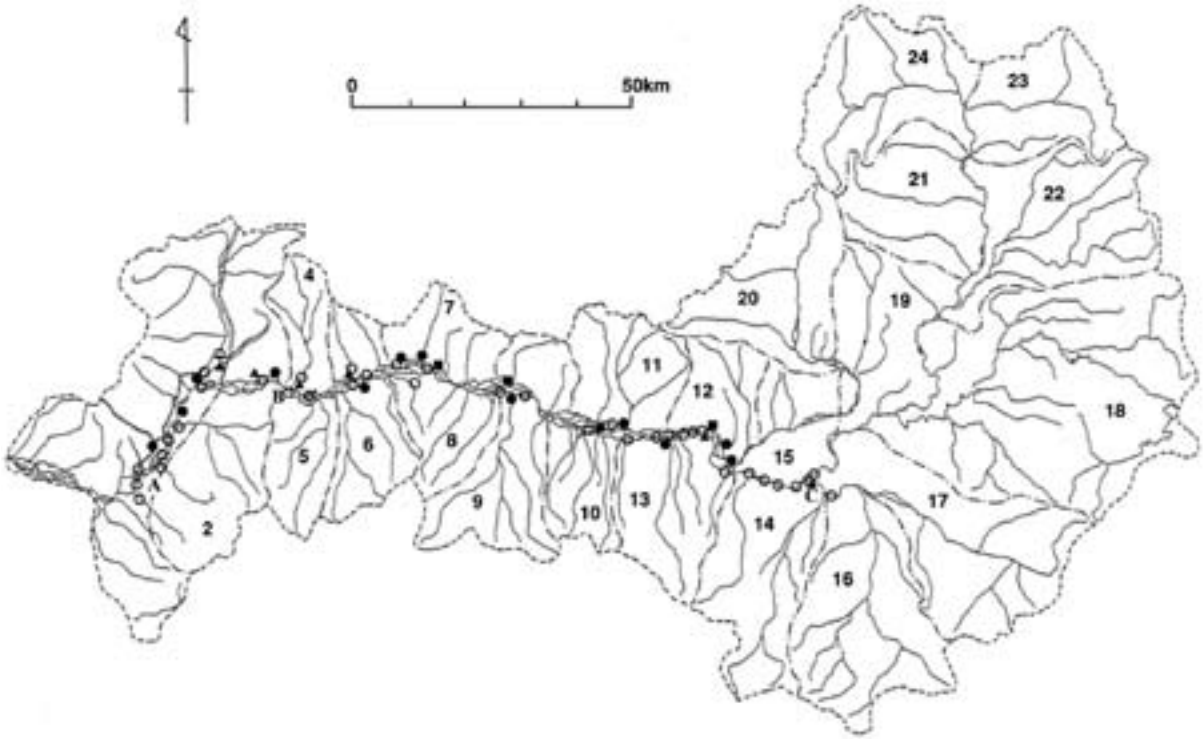
ただし、交通輸送手段が人力、畜力に頼っていたために、行動範囲には限界があった。そのために、村の配置も影響を受けた。基本的には猟場や漁場の近くに家や仮小屋を建てて、手こぎボートやスキーで動ける範囲で狩や漁を行った。また、集落も小人数の小さいものが各地に散らばるという形になった。

3. ライフスタイルの近代化と交通手段、狩猟用具の変化

1860年にウデヘが暮らしてきた極東地域が帝政ロシアの領土にされた。それとともに彼らの上に「近代」という時代が降りかかってくる。近代社会でも彼らが生産する毛皮は珍重されて、高い値段でうれた。しかし、それとともに、銃や鉄製の捕獣器など、自分たちでは作れない近代文明の利器が導入されてきた。それらは非常に効率よく獲物を捕らえたが、毛皮を少々売った位では手に入れることができないほど高かった。それを手に入れるために、ウデヘの猟師たちは借金地獄に飲み込まれ、商人たちの支配下に入れられていった。彼らはひどい場合には２、３本のウォッカと交換で大量の毛皮を巻き上げられたりした。

社会主義政権のソ連は、そのような状態からウデヘたちを救った。しかし、彼らをしっかりと社会主義計画経済の中に組み込むことを忘れなかった。

ソ連政府はウデヘたちを集団農場や国営農場に組織した。ビキン川流域ではゴスプロムホースと呼ばれる林業、狩猟業、漁業などからなる複合国営企業が結成され、ウデヘの猟師たちは狩猟部門の貴重な戦力とされた。彼らが生産するクロテンの毛皮は、欧米にも輸出できて外貨を稼げるソ連有数の輸出品だったからである。その生産を管理、奨励するために、政府はビキン川流域の猟場をクロテンの猟場ごとに分割して猟師に割り当て、生息数と狩猟数を厳密に管



ビキン川流域のクロテンの猟場と村
A：クラースヌィ・ヤール村

理させるとともに、生産効率を上げるために、国営企業を通じて猟師たちに鉄製の捕獣器や高性能のライフル銃や散弾銃を安価に提供した。また、行動を迅速にし、その範囲を広げるために、船外機付きボートやスノーモービルの普及が図られ、その燃料やメンテナンス用の資材も安定的に安く提供した。そのために、猟師たちの行動範囲は飛躍的に増大した。

しかし、他方で、住民の管理を強化するために、ビキン川流域の全住民をクラースヌィ・ヤールと呼ばれる新しく建設した行政村に強制的に移住させた。その結果、猟師たちは家と割り振られたクロテンの猟場の間を定期的に往復することになったのである。それを可能にしたのが、船外機付きのボートやスノーモービルであった。また、非常に遠い猟場が割り当てられた猟師にはヘリコプターでの送迎も行われたという。

4. 近代化されたライフスタイルの功罪

ところが、近代装備は決定的なアキレス腱を抱えていた。それは、銃にせよ、ボートにせよ、基本的に猟師自身が自分で生産できず、外から購入しなければならないものだという点である。特にボートやスノーモービルにはガソリンという高価な燃料が必要である。それらが安価に安定的に供給されているときはいいが、供給体制が崩壊する、あるいは毛皮類の価格が暴落して、売り上げだけでは燃料、資材の購入価格に追いつかないような状況になったとき、猟

師たちは深刻な状態に陥る。それが両方現実となったのが、1991年のソ連崩壊後のロシア経済の混乱であった。この時ウデヘたちは一時的ではあったが未曾有の危機に直面した。

現在、ビキン川流域のウデヘたちはかつての複合国営企業を株式会社に変えて林業を柱に据えて何とか経営を続けている。かつての花形産業だったクロテンの狩猟は、毛皮全体の市場価格の低迷のために、すでに売り上げに占める割合は数パーセントに過ぎなくなっている。しかし、狩猟はウデヘの文化的アイデンティティの根幹をなす活動であるため、会計ではどんなに赤字になっても、継続している。狩猟の継続は経済効率には替えられないものだからである。

猟師、特にウデヘや日本の東北地方のマタギなどの北方の猟師を見ていると、彼らは実に合理主義者である。狩猟の用具類や装備を見ていても、自分たちを取り巻く自然環境と社会経済的な条件を加味しながら、次々と新しいものに乗り換えていく。弓矢や槍から散弾銃やライフル銃へ、木の丸太で作った罠から捕獣器へ、手こぎのボートやスキーからモーターボートやスノーモービルへといとも容易く乗り換えていく。それはただ、単純に近代装備の方が優秀だからではない。罠などは捕獣器よりも丸太でつくった伝統的な罠の方が毛皮を傷めない点では優れている。しかし、彼らは社会情勢を見ながら、今はどのような用具を使うのがふさわしいかを判断して自分で選んでいるのである。

ウデヘがビキン川流域の天然林を守り抜いているのは、決して彼らが自然民族だったからではない。天然林は生きるのに必要だったからこそ良材があるのにもかかわらず伐らないでいたのである。ウデヘの森は狩猟対象の動物や採集植物、魚の宝庫だっただけではない。そこは彼らにとっては神聖な霊の世界でもあり、彼らの文化の根源に関わる重要な場所なのである。

ビキン川で活発に活動を続けるウデヘの姿には、伝統と近代という両立が難しい両者をうまく両立させてきた自負が窺える。先住民族たちを、伝統に生きる人々、あるいは自然と共生する人々という視点だけでなく、近代と共生してきた人々という視点でも見る必要がある。そこにいま自然界（野生動物たち）が近代化した人間世界に迫りつつある日本の現状を打開するヒントが隠されているように思われる。

船外機付きのボートと伝統的な丸木舟

現代のウデヘ猟師のスタイル

アーミッシュのユートピア探求

先端人類科学研究部 教授　鈴木　七美

アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州へ旅すると、右側通行にも戸惑うが、蹄の音を響かせて道行く馬車に目を奪われる。昔風の服に身を包み手綱をとるのは、キリスト教再洗礼派アーミッシュの人々だ。宗教的寛容で知られるこの地に18世紀にヨーロッパから移住したアーミッシュは、オハイオ州やカナダのオンタリオ州にも生活の場を広げている。聖書の解釈に基づく生活実践のヴァリエーションによって様々なグループに分離してきたが、いずれの地にあっても、コミュニケーションや教育と職業などに関し、独自の信念を守り表現している。現代文明に批判的で、テレビ、コンピュータ、電話を使わず、高等教育を受けず、非暴力主義の主張から戦争にも反対である。生命あるものの息吹を感じつつ大地を耕し、３世代以上の大家族とともに暮らすことを理想としている。「がんこな人々」のようだが、訪ねていけば陽光溢れるポーチでゆったり語ってくれる。家の周りでは裸足の人も多く、動物や子どもたちが動きまわり、「土」の香りがいっぱいだ。

近年アーミッシュは、益々注目を集めているようだ。少子高齢時代にあって、グループの人口は増加しつつある。子どもたちは信条を自ら選びとることができるが、多くはアーミッシュとして生きることを選ぶという。日常生活に関わる様々な規則「オルドゥヌング」は常に検討されており、変動する社会における暮らし方の選択が続けられている。信条を保持しつつ世界各地の被災地や紛争地への援助活動を実現するために、様々なグループが協働の方法を模索している。ここでは、1998年より続けてきた現地調査に基づき、アメリカ社会におけるアーミッシュのライフスタイルとメッセージを検討することをとおして、私たちの暮らしの可能性を参加者と共に考えたい。

アーミッシュの交通手段、バギー

アーミッシュ独特の柄

アーミッシュ・メノナイトの女性たち

おそろいの服で農作業

参考文献：
「キリスト教非暴力・平和主義の底流―再洗礼派メノナイト・アーミッシュ」
（『結社の世界史５　クラブが創った国アメリカ』、山川出版社、2005年）

「改革派キリスト教徒の共同体」（『北米の小さな博物館』、彩流社、2006年）

「医療・身体論　展望―差異と個別性の時代のライフデザイン」
（『文化人類学20の理論』、弘文堂、2006年）

「アーミッシュのユートピア」（『言語』、大修館書店、2002年４号）

「アーミッシュを訪ねて　歴史的背景と多様性」
「信仰と家族・コミュニティ」
「コミュニティの中での教育」
「食文化」
「フォークアートとキルト」
「現代アメリカ社会とアーミッシュ」
『言語』、大修館書店、2003年４－９号連載）

『癒しの歴史人類学　ハーブと水のシンボリズムへ』（世界思想社、2002年）

『出産の歴史人類学　産婆世界の解体から自然出産運動へ』（新曜社、2008年（1997年））

万国津々浦々

アーミッシュの人びとのコミュニケーション
—アメリカ合衆国における静かな試み—

鈴木 七美
（すずき ななみ）
本館先端人類科学研究部

ニッケル・マインズ銃撃事件の波紋

六月に三年ぶりでペンシルヴェニア州ランカスター郡を訪れると、緑のトウモロコシ畑が地平線まで続く変わらぬ風景が広がっていた。馬車が乗用車と同じ舗装道路を行き交い蹄（ひづめ）の音がして馬糞の匂いも漂っている。今回は「アメリカのアーミッシュ」というテーマの国際学会で、一九九九年から京都文教大学文化人類学科の学生たちとこの地で調査してきた経過を報告した。会場には研究者たち、伝統的服装に身を包んだアーミッシュの人びと、そしてメディアや警察関係の人まで詰めかけていた。

アーミッシュの起源は、一六世紀スイスの宗教改革急進派アナバプティスト（再洗礼派）に遡る。迫害を逃れて新天地を求め一八世紀に移住したアーミッシュは、もっとも保守的とされるオールドオーダーのグループが一般社会と分離しかつて変わらぬ生活を目指していること、高等教育に反対でワンルーム・スクールで八年生までの教育に限定していること、非暴力の主張から戦争や軍隊を否定していることから、常にアメリカ社会に波紋を投げかけてきた。最近は人口が増加しコミュニティが拡大していることでも注目を集めている。現在はとりわけ、二〇〇六年一〇月に起きたワンルーム・スクールでの銃撃事件によって静かな地域は多くの人びとに知られるようになった。無抵抗の少女たちが犠牲となったことはもちろんだが、事件直後にアーミッシュが銃撃犯を「許すこと」（forgiveness）を表明したことが伝えられ話題となっている。

アーミッシュのメッセージ

長きにわたって学生たちやわたしとともに歩いてくれたアーミッシュ・メノナイトのAは大分年をとった。きまりに従わないメンバーに対し社会的忌避（shunning）を実践するオールドオーダー・コミュニティから離脱して以来、忌避（shun）され続けてきた。いちばん辛いのは、家族が苦しんでいるとき、助けることが許されないことだという。

彼女に勧められてわたしは犠牲となった少女たちの関係者を訪問することになった。近くに来たら必ず声をかけるのがこの辺のつきあい方なのである。といっても、現代社会の悪を呼ぶと警戒されて電話はないので、一軒ずつ戸を叩く。裸足で出てきたメノナイトのIは、「許し」について、「リベンジ」を思わないことによって被害者が「日常生活として今日を生きること」「コミュニティが明日に備えること」と解説してくれた。だが子どもに「許すこと」を伝えるのは難しいという。三人の娘が巻き込まれ一人を失ったLは「子どもは八人いたが今は七人」と語り、治療中の娘の経過を細かに伝えた。銃撃事件後この地では、教派をこえて人びとが語り合うさざめきが聞こえるようだ。もとアーミッシュ・メノナイトで現在はモダン・メノナイトとして会社を経営するHは、スポークスマンを務め、世界各地から寄せられる手紙や見舞の品を彼らに届けている。

ランカスター郡アクロンには北米でもっとも大規模なメノナイトを中心とした、世界の災害・貧困・紛争地への援助組織がある。フェアトレードを謳う店舗「一万の村」も北米各地で展開してきた。近年宗教上の紛争調停への参加を試みている。訪ねると、アーミッシュも生活様式を変えずに活動に加われるよう工夫が凝らされている。メノナイトとアーミッシュは宗教的実践の違いから反目し分離してきたが、近年は同じ目的にむけて協力する姿勢が顕著だとAも語る。姪のメノナイトRの教会でも、最近は信条によって異なる衣装をつけた人びとがともに礼拝するようになった。Shunに悩む元アーミッシュへの支援にもさまざまなグループがかかわっている。信念を保持し差異を認識しつつどのような協同の実践が可能なのか、世界から距離をとるアーミッシュたちがメッセージを投げかけているのかもしれない。

みんぱく開館30周年記念事業報告

国立民族学博物館　開館30周年記念式典

2007年11月14日（水）に、本館講堂において、国立民族学博物館開館30周年記念式典を挙行しました。秋篠宮同妃両殿下のご臨席のもと、関係者約450名にご出席いただきました。

松園万亀雄館長、石井米雄人間文化研究機構長の式辞のあと、秋篠宮殿下がお言葉を述べられ、続いて文部科学大臣（藤木完治大臣官房審議官代読）、大阪府知事（山登敏男副知事代読）、小平桂一総合研究大学院大学長からそれぞれ祝辞が述べられました。

式辞を述べる松園館長

国立民族学博物館　開館30周年記念講演・対談
「モザイクの思考 ―多様性を求めて―」

2007年11月18日（日）に、解剖学者の養老孟司氏をお招きし、講演会を開催しました。

講演の後、同氏と松園万亀雄館長による対談が、坪倉善彦NHKアナウンサーの司会により行われました。

解剖学者、文化人類学者としてのそれぞれの専門的立場から、「脳が見る世界」と「民族学がとらえる世界」を基軸に、活発な意見交換が行われました。

左から、松園館長、坪倉アナウンサー、養老孟司氏

みんぱく開館30周年も、残すところあと１か月をきりました。
みんぱくでは、開館30周年を記念し、たくさんの記念事業を開催しました。
その一部をご紹介いたします。

開館30周年記念　開館記念日カウントダウン・イベント
「おかげさまで30年　カウントダウンゼロ」

本館の展示が一般公開されたのは、1977年11月17日。

開館記念日である2007年11月17日（土）に、本館エントランスホールにおいて、カウントダウン・イベントを開催しました。

30年目をむかえたこの日は、10時の開館と同時にイベントがスタート。松園万亀雄館長による挨拶に続き、グループ「パガナイ」によるフィリピン民族音楽のクリンタンの演奏が行われました。

多くの来館者とともに、盛大に30周年を祝うことが出来ました。

挨拶をする松園館長と、「パガナイ」のみなさん

みんぱく来館8,888,888人（セブンエイト）

2007年10月30日（火）に、8,888,888人目のお客様のご来館がありました。

8,888,888人目のご来館となったのは、池田市立石橋南小学校３・４年生のみなさん（100名と引率の先生５名）です。

ご来館にあたり、そのお出迎えイベント「みんぱく来館セブンエイト」を実施いたしました。

石橋南小学校のみなさんと、世界各地の民族衣装（民博所蔵）に身を包んだ本館若手職員

ご案内

開館30周年記念として企画された事業のうち、
３月末まで引き続きお楽しみいただけるものをご案内いたします。

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう 好評開催中

2007年４月からはじまったウィークエンド・サロン。休日の午後にみんぱくの教員が展示場に現れて、最新の研究成果などをご紹介しながら、来館者のみなさまと語り合います。

1月6日（日）に開催された、「ガムランのリズムを体験しよう」では、福岡正太准教授の解説のもと、展示場（音楽展示）にあるガムランを実際に鳴らしてみました。たくさんの参加者も、手拍子でその不思議なリズムを体験しました。

※今後の開催テーマ・場所など、詳しくは、はさみ込みチラシ、またはみんぱくウェブサイトをご覧ください。

ラジオ番組出演情報 好評放送中

みんぱくの教員がラジオに出演しています。最新の研究成果はもちろんのこと、海外での失敗談、現地の人々との交流の様子などを、気軽にお聞きいただくことができます。

ラジオ大阪（AM1314Khz）「みんぱくラジオ～世界を語る」 放送時間 ▶ 毎週日曜日 21:00～21：30

●今後の出演者（予定）　3月 9日（日）横山廣子（民族社会研究部准教授）
3月16日（日）川口幸也（文化資源研究センター准教授）
3月23日（日）杉本良男（先端人類科学研究部教授）
3月30日（日）朝倉敏夫（民族文化研究部教授）

●番組のブログ……ラジオ大阪　OBCブログ「みんぱくblog」
http://www.obc1314.co.jp/blog/minpaku/

FM千里（FM83.7Mhz）「昼どきパーク837」 放送時間 ▶ 第1、3、5水曜日 12:00～12:30

●今後の出演者（予定）　3月19日（水）横山廣子（民族社会研究部准教授）

※ラジオの視聴エリアは、各ラジオ局にお問い合せください。